

〈117〉は、映像体験における聴覚と視覚、反復されるメディア内の時間と実時間との間での同期と不一致をテーマにした実験映画のインスタレーション。モチーフとなったのは、もはや実用性を失い、忘れられつつあるNTTの電話時報サービス「117番」である。作者の扮する「時報男」は情報社会を生きる人間の青ざめたカリカチュアであり、機械的な時間を身体に内在し、接続と同期を永遠に繰り返す。

（この作品の構成を言葉で大まかに説明しておく。展示空間には壁面投影された映像、スピーカーからの音、少し離れた場所に旧式のアナログ電話機と、現在時刻を示す時計（電波時計）がある。映像には男が写っており、二種類の動作を行う。ひとつはマイクに向かって映像再生時の日付と時刻を喋ること。もうひとつは電話をかけること。「時報男」が電話をかけると、展示空間の実物の電話のベルが鳴る。もし観客が受話器を上げたら、男の声で、117番ふうの時報音声が入りこえる。男が読み上げる時刻は秒単位で時計とシンクロしているはずだ。）

2020年、新型コロナウイルスの流行に伴う社会的混乱の中で、私の時間感覚は麻痺し、精神は抑鬱状態を呈していた。私はこれまで音響メディアを用いて作品を作ってきたが、そのとき私は、時間と呼ばれるものそれ自体について考えなければならなかった。私は自分自身の声を毎日一回ずつ録音する行為を始めた。この行為を続けることで、「ゆく川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」という『方丈記』の冒頭ではないが、時間内における身体と環境の変化と同一性についての、何かしらの知見が得られるのではないかと考えた。答えはまだでない。私は死ぬまで録音を続けるだろう。

そうした行為を続ける一方で、今日私たちが時間と呼ぶものが多分に技術的な何かであることについても、考えないわけにはいかなかった。「時間／空間」という対比が未分化な瞬間ごとの知覚、一日の生活サイクル、想起される過去などといった生の時間とは切り離された均質なグリッドの中に私たちがいるということ。技術の発達によって世界が加速度的に同時化しているということ。過去の時間の痕跡を、時間性を保ったまま保存する種々の技術——こうした物事について考えるうちに、「声の肌理」であり、時計であり、通信であり、映画でもあるところの、〈117〉という作品のアイディアが浮かんだ。

今日の時報電話は電話網上の忘れられたモニュメントであり、その無用さと自己言及的な性質ゆえに、電子音楽作曲家が「崇高」と呼ぶであろう雰囲気すら帯びている。私は117番に電話をかけると恐怖を感じる。あらゆる場所が瞬時にある均質な「いま」にチューニングされる恐怖。117番が不要になり忘れ去られたということは、その原理がより精緻になり、不可視で偏在化し、私たちの身体より近いところに接近していることに他ならない。だからこそ、117番は、私たちの住まう世界の起源として聴かれるべきだ。私は自ら117番を「演じる」ことで、テクノロジーに依存した社会システムに生きる私たちの生の一側面を強調したかった。

私は時折映画の音作りを頼まれる。私はそれが一種の記号の操作だと思っている。そして映像制作の現場で、音と視覚的な運動との同期が人工的に演出されることに興味を抱いている。代表的な例の一つがセリフのアテレコ（アフレコ）だ。〈117〉は、ループ再生される動画に対して、再生時の時刻に即した音声ストックを自動的にアテるアルゴリズム装置でもある。口元を見せない撮影アングルや、マイクや電球といった小道具によって、声の不自然さはカバーされる。ここには時報電話とは異なる種類の同期の技術がある。

男が喋る時刻の音声は私自身の声を使った。先のアテレコの原理からすれば他の誰でも構わないのだが、私はずっと、録音した自分自身の声を作品の素材に使用してきた。声は、「私」というもののリアリティーに密接に関わるもののようだ。その声が記録されたとき、「私」はどのように変容するのか。録音された古人の声を聴くとき、音は聴く者にある「私」を憑依させる。

〈117〉は、理想的には、私の死後も永遠に「いま」を表示するある「私」だ。それは多分私ではない。

〈117〉は一種の寓話であり、その語りの冒頭は「昔々……」である。ダイヤル式のアナログ電話を使用することで、私は電電公社の117番が実用的に「現役」であった昭和の大時代的な雰囲気を取り入れたかった。そしてダイヤル式アナログ電話には、本物のベルが付いている。聴覚とは本来的に、いま／ここに根ざした感覚だ。音は常に、何かの知らせであるところの「〇〇の・音」だ。録音術はそうした感覚を混乱させる。しかし、117番の無限ループする「いま」の知らせとは異なる質が、電話のベルの音にはあるだろう。この作品で偽物でないものはそれだけだ。